

アナウンス「する」ということ

息をつかうことがアナウンスです。

アナウンスをするためには息の使い方が大切です。息は深く吸いましょう。ですが、深く息を「吸う」ためには、まず「吐く」ことからはじめなければなりません。吐ききって吸うのです。

ただ吐くのでは、よく分からないので、声をのせるのです。このための練習が「ロングトーン」なのです。長い声を出すのではなく、深く息を吸うための練習が「ロングトーン」なのです。息を吐ききって、大きく吸う。声が長く続けばいいというのではないのです。三十秒ぐらいかけて、一定の量で息を吐きながら声をのせましょう。

正確な発音がアナウンスです。

声を音にしてすべて息に乗せ、ささやかないっきりと声にすること。大きな声というより、一定の音量で、明確、クリアな「音声」、正確な「音」を作ることが大切です。そのためには「滑舌」の練習も必要になってきます。

大声で怒鳴らないで下さい。

「アイエオ」、「アエイウエオアオ」、「イエアオウウオアエイ」など、いろいろありますが、何を「目的」としているのかを、はっきりと考えながら発音していかないと、いくら「音」を出し続けても無意味ですね。

「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」日本語の基本は、この「母音」です。

この頃、「ウ」の音が平たくなってしまいがちです。

「リ」、「ニ」などの音も、ぼけやすい音なので

口の周りの筋肉、喉やアゴの筋肉もしっかり使って発音しましょう。

いい声を育てていくのがアナウンスです。

まず、普段使っている「地声」を鍛えましょう。その「声」が、これからもずーっと、話しやすく聞きやすい「いい声」に育てていくのです。腹式呼吸と地声のコンビネーションが良くないといい声が出ないのです。この頃は、マイクの性能が良くなって、どんな声でも拾ってくれますからごまかす事はできます。ですが、「本物」の声で「勝負」しないと長持ちはしないのです。へこたれてしまうのです。

一定の音量で、毎日一時間以上(できれば三時間ぐらい)、

何かを読み続けることが一番の練習です。

咽喉と声帯を丈夫にする、それが声を育てることなのです。

声を作りすぎて、「地声」が分からなくなったり、かっこつけすぎて

いやらしく聞こえたり、「地声」は自分の声、「自声」でもあるのです。

鍛えて育てていけば、誰でも、心にまで響くいい声に育てていくのです。

確かなアクセントがアナウンスです。

一つ一つの、言葉のアクセントは「アクセント辞典」で確かめながら、丁寧にアクセントを身に付けていかななくてはなりません。まるで「語学」なのです。そして、言葉と言葉の関係によっても、アクセントは変化するのです。たとえば、「ころ」に、色々な言葉や助詞をつけてみましょう。法則もありますが、耳を鍛えて、耳からおぼえることも大切です。アクセントの上下の幅は、時代や使う世代によって絶えず変化するものです。臨機応変に、色々な読み方ができるようにしてください。いくつかの言葉がくっついていてもアクセントは変化してしまいます。普段から、アナウンサーなどの言葉を聴いて確認して、自分で発声して、アクセントを自分のものにしていきましょう。

聞きやすい「間」がアナウンスです。

文章の意味で切ること、が鉄則です。読んでいる調子で切ったり、自分の癖で切るなんとなく切るのはやめましょう。そのためには文章をよく読みこむことが大切です。軽い文の前には、あまり間を取らないこと。

「皆さん、こんにちは。お元気ですか」の、「お元気ですか」前に長い「間」は要りません。

対して、長く連なった文の前には、長い間が必要になってきます。

「皆さん、こんにちは。アナウンスのコツについて皆さんに大事なことを伝えなければなりません」の「アナウンス～」の前には、ちょっと長めの間が必要になるのです。

ただ短くても重要な文の前には、それなりの「間」が必要となるのです。

たとえば、「あなたが、好きです」

一つの文の途中では、息継ぎをしないで、息を止めるだけの「間」もあります。

加えて、息を盗む技術も必要になってきます。息をたくさん吸わず、素早くすこしだけ息を継いで、読み続けることも必要な技術なのです。

マイクの前で話すのがアナウンスなのです。

マイクの性能が向上して、息継ぎの音や、は行の音などの吹いた音も拾います。

響きのいい大きい声というより、

無駄のないしなやかな声が、細くともマイクにはあっていたりもします。

実際のマイクを使って自分の声を聞きましょう。

そのとき、首を降ると、音声が震えるので注意したいものです。

コンテストの前に急に練習しても、逆に喉を痛めたり、発声を不安定にさせるだけです。

日常会話を意識的に話すことでも、十分練習となるのです。

「いい声ってなに？」、いつも考えましょう。自分の声に興味を持ってください。

アナウンス原稿は取材から。

耳を澄ます、目を凝らす、そしてにおいを感じ取る。
きっと、どこかで、誰かが、何かをしています。それを感じて、取材対象を探してみよう。
人物、建物、文化、地域、自然、……。取材されたがっているものがあるはずだよ。

心を開いてくれるまで、じっと見る、じっと聞く、じっと考える。
取材対象が決まったら、その何かが、見えてくる、話し始める、面白く感じるまで一緒にいよう。

語りかけてくる言葉を逃がすな。
メモやカメラ、レコーダー、そんなものを必ず持って、取材をする。
生の言葉は、すぐに逃げてしまいます。絵も、自然も何かを語りかけているものなんだよ。

まず、メモにしてみよう。
一本の原稿の「中心」は何なのか。取材した材料を並べて、上から見てみよう。
中心が決まったら、その周りに並べてみよう。順番を考えながら。

とりあえず一本行っとく
まず、書いてみよう。取材したものが頭の中から逃げないうちに。
そして、思い出すことがあるはず。匂いや、光や、言葉など。忘れずにメモに加えよう。

その人の言葉は、その人ですか？
具体的な表現や新鮮な驚きを与えてくれるのがインタビュー。
そんなことしか言わなかったの？それは取材をした人の突っ込み不足。
もっといい言葉を話してくれるまで、食いつこう、その人の言葉が出てくるまで。

決まりきった言葉は退屈です。
あなたも感じることでしょ。決まりきった言葉を使っている原稿はやめたいと思っているんです。と言いながら、実は本当に伝えたいことは何なのかと言うことが分からなくなっていることが、教えることの難しさにつながる。伝える、今こそ、その言葉を考えるべきなのではないでしょうか。

誰が何。何が何。何がどうした。
主語と述語はすっきりと近い場所に来るよう心がけよう。
そして、言いたいテーマはなるべく早く登場させよう。

何度も書き直すことが、一番早く原稿を書き上げる。
消しゴムはやめて、少し汚くなってもいいから、横に書いたりして、
少しづつ原稿を直していくのがいいみたい。そして、なんとなくまとまったら
原稿用紙に書いてみる。声に出して読んで、書いて、直して、読んで、書いて、直して、……。

さあ、出来上がり。
書き上がったなら、みんなに聞いてもらって意見を聞くことを忘れずに……。